

The TENDAI journal

発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 寺本 亮洞
〒520-0113 大津市坂本 4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

令和元(2019)年8月1日 木曜日
(毎月1日発行) 1部50円(消費税込・送料別)

天台ジャーナル



広報天台

「天皇陛下御即位奉祝法要」を奉修

— 11月5日、比叡山延暦寺大講堂にて —



桓武天皇柏原陵(かしわばらのみささぎ)。京都市伏見区桃山町

桓武天皇陵の参拝、一隅を照らす運動50周年記念式典も

天皇陛下が国内外に御即位を宣明される「即位礼正殿の儀」に10月22日、臨まれることから、天台宗では11月5日に「天皇陛下御即位奉祝法要」を森川宏映天台座主猊下を大導師に、比叡山延暦寺大講堂で奉修する。また同日は、桓武天皇陵への参拝、一隅を照らす運動発足50周年記念式典も行われる。杜多道雄宗務総長は「天台宗を挙げて御即位を寿ぎ、開宗を認めていただいた桓武天皇に報謝し、宗祖伝教大師の御誓願を再確認する機会にしたい」と話している。

宗祖伝教大師最澄さまは、より深く天台教学を学びたいと桓武天皇に願ひ出られた後に入唐求法され、多くの経典や法具を携えて帰国。『法華経』に基づいた「すべての人

が仏に成れる」という天台の教えを日本に弘めるため、天台華宗の設立許可を願い出て、延暦25年(806)1月26日に年分度者2名認可の官符が発せられた。天台宗では、

この日を開宗記念日としている。

時の桓武天皇は、平安京遷都と東北地方平定に伴い日本全土を統一し、平和な世作りを目指していた。国や人びとを救済する菩薩僧の育成に尽力された伝教大師の御誓願

大導師に森川座主猊下を迎え

11月5日は、天台宗内局、宗議会、宗務所長会の代表者らが京都市伏見区の桓武天皇陵を参拝し法楽を捧げる。その後、11時より延暦寺大講堂で、森川宏映座主猊下を大導師に、奉祝法要を厳修する。

宗議会と宗務所長会の代表者らが出仕予定で、宗と延暦寺内局員、宗内諸大徳らが随喜し、雅楽と奉祝舞で天皇陛下の御即位を祝す。

また午後からは、一隅を照らす運動発足50周年記念式典があり、運動の更なる発展を決意し、次の50年、百年へと続く時代の幕開けを告げる。法要に向けて杜多宗務総長は「令和の新時代を迎えたが、今なお人の命が簡単に奪われ

は、桓武天皇にとつて新時代を築く支柱であったとされる。天台宗が「桓武天皇御願の宗」とも言われる由縁である。このように皇室と深い御縁で結ばれてきた経緯から、杜多内局は奉祝法要の奉修を発願した。

また、伝教大師のご精神を現代に活かすために始められた「一隅を照らす運動」が50周年を迎える。それを機に、令和の新時代へ運動理念を再確認し、今後につなげていきたいと考えている。

るなど殺伐としている。『生命』『共生』『奉仕』という実践目標を掲げている一隅を照らす運動は、いまだからこそ国を救う、精神的支柱になりえるだろう。それを我々自身も再確認する意義が、この法要にあると思う。新しい天皇陛下のもとで、我が国が伝教大師の浄仏国土建設の御誓願が実現されるような世の中にするために、我々も、天台宗の教えを再確認し、新たな活動へのきっかけにしたい。『もし伝教大師が今おられたら、この世の中をどうご覧になられるだろう』と考えながら、布教や行動へ繋げる機会にできれば」と願いを語っている。

極微

「目から鱗が落ちる」という言葉がある。意味は「何かをきっかけに、今まで分からなかったことが突然、分かったり、間違いに気づいたりすること」だ。近頃は縮めて「目から鱗」という言い方も若い人の間では増えた。この言葉の語源については、知らない方も多いのでは。実は当方も知らなかったが、これは新約聖書からきているそう。使徒パウロがまたパウロと呼ばれていた頃、彼はキリスト教徒迫害の急先鋒に立っていた。ある時、パウロは天から光を受けて倒れる。我に返ると失明していた。その三日後、主によって遭わされた主の弟子アナニアによってパウロの目から鱗のようなものが落ち、パウロは視力を取り戻す。その後、パウロはキリスト教徒となるのだ。「パウロの回心」と言われているが、「目から鱗が落ちる」という言葉はこの故事に基づいているという。最近、目から鱗が落ちたことは、テレビの天気予報のこと。気象予報士は降水確率0%を「ゼロ」とは言わず「レイ」という。ずっと気にもしていなかったが、これはゼロが「全く無いこと」をさすのに対して、レイの元になる漢字の「零」には「極めて小さい」という意味もあるためだそう。完全に「降らない」とは言えないだけに「そんなのか」と思う。この説の真偽は分からないが、本当なら「目から鱗が落ちる」話ではある。